

被爆1世のライフヒストリー研究がもつ現在の意味に関する検討

—広島市を中心にした参与観察とインタビュー調査の結果からの示唆—

愛知教育大学・青山女子短期大学非常勤講師 徳久美生子

1. 目的

この報告の目的は、被爆1世のライフヒストリー研究が現在どのような意味を持ちうるのかを検討することにある。被爆1世の高齢化が進行する中、被爆体験を継承するために、行政、平和運動、NPO、メディアを中心にした様々な取り組みがこれまでに実行されてきた。だが、被爆体験の序列化、被爆証言の政治性、ステレオタイプ化が指摘される中(直野 2009)、被爆証言の「陳腐化」「風化」(小倉 2013)という新たな問題状況が生じている。本報告では、このような問題状況に対して、個人の人生に光をあてその全体を聞き取るライフヒストリー研究がどのような解決の道筋を提示出来るのかを明らかにする。

2. 方法

そこで、広島市を中心にして被爆1世を対象にライフヒストリーの聞き取り調査を実施した。その上で、4名の被爆2世にインタビューし、被爆1世の生き様が被爆2世にどのような影響を与えたかを聞いた。さらに広島市における海外研修生を対象にした研修プログラム、セミナー、シンポジウムに参加した。伝承者プログラムの当事者からは、長時間話を聞いている。以上の方法によって被爆1世のライフヒストリーが現在どのような意味を持ちうるのか検討した。

3. 結果

分析の結果、被爆1世の被爆体験は多様であり、その後のライフヒストリーもバラバラであることがわかった。また被爆体験に対する見方、考え方にも相違があることがわかった。そして「被爆者」ではない人々から医療費の補助などをめぐる非難にさらされたことがあったこともわかった。さらには被爆1世から被爆2世への影響のあり方もまた多様であった。

ところが参与観察を続けている同窓会では、被爆1世たちは、意見に相違があっても、他者たちとの考え方の相違に異議申し立てをすることなく、また徹底的に議論することもなかった。彼女らはポジティブにあきらめてコンフリクトと共存していた。

しかしながら経験や考え方が多様であることは、次世代に向けた共感の可能性が複数あるということでもある。少なくともコンフリクトと共存してきた被爆1世たちの生き様は、他者との相違を認めた上で、他者(死者たちを含む)とともに生きるとはどのようなことなのかを示していた。

また被爆1世と同じ時間を共有してきた被爆2世の視点から捉え直すことには、「被爆1世」という個人のライフヒストリーにリアリティを付与し、現在へとつなげる可能性があることが判明した。

4. 結論

以上から、以下の3点が明らかになった。

- ① 被爆体験の継承が被爆という過去の物語をひとつの教訓の歴史として語り継ぐための営為であるとしたら、被爆1世のライフヒストリー研究は、原爆という絶後の体験を生き抜いた被爆1世の経験を現在という時点から捉えなおし、未来への共感の回路を切り拓く試みとなる。
- ② 個人の経験を個々の経験にとどめて、無理に大きな物語をつくることなく分析することで、陳腐化・風化にさらされている被爆証言とは異なる道筋から多様な共感の回路を提示出来る可能性がある。
- ③ 個人の歴史への拘りは、時に個々の生命を軽視し、あるいは複数の生命の価値に線を引く戦争というものに対する、ひとつの抵抗戦略でもある。

参考文献

- 小倉康嗣 2013 「被爆体験をめぐる調査表現とポジショナリティ」 浜日出夫・有末賢・竹村英樹(編)『被爆者調査を読む』慶應義塾大学出版会 pp. 207-254.
- 直野章子 2009 「被爆を語る言葉の隙間：＜被爆者＞の誕生と『被爆体験記』の始まりから」 関西社会学会『フォーラム現代社会学』8：13-30 世界思想社。